
マンドラゴラ畑でつかまえて ♪

H a n z o

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マンドラゴラ畑でつかまえて♪

【Nコード】

N9009X

【作者名】

H a n z o

【あらすじ】

日本の技術再興のため日本を代表する大企業、國枝重工が世界中からあらゆる職人を集めた新興の町、少閑町^{しょうかんちょう}。五年前からそこに暮らしている葛葉匠^{くすのはたくみ}は國枝工業の経営する私立少閑学園の高校二年生。彼は五月のある日曜日に情眠を貪っていた。そして、そこに運命が訪れる！そう、隣に越してきたイリーナ・フォルムングという名の同級生の“魔女”という運命が…！

始め

…キーツ…ボタン…、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ…

「オーライツ！！オーライツ！！オーライツ…！！」

…日曜の俺の朝の貴重な微睡みを満喫しようとした俺の目論見は、微妙に音階のズれる車のバックの警告音と威勢の良いおっちゃんの掛け声で見事に打ち砕かれた…。

「…んだよ…！」

日曜の朝なんだから静かにしろよな…」

がりがりと頭を掻きながらベットのうえで体を起こす。

…あーっ、気怠い…。あの起きるか起きないかのギリギリの意識のところで、もっともっと漂っていたかったのに…。誰だよ、こんな早くから！

…本当は早くはないんだ…。時計の針は10時を回っているのは知ってるんだ。

この時間にこんな生活音で起こされたからといって文句なんか言っていく所はないし、言ったところで質の悪いクレーマーと思われるだけだ。

だが俺は行動を起こすことにした。
所謂ところの八つ当たりって奴だ。

俺は気が短い。

だが怒鳴り込んだり殴り込んだり、暴力に訴えることはしない。

俺は武道なんか習っていないし体力に自信はない。なにより平和を好む、若干ひ弱寄りな高校二年生だ。…後、肝っ玉も若干小さめだ…。

じゃあどうするか？

…窓から俺を起こした現況を睨むんだ…。

…あははっ、まあ俺に出来ることはそんなもんだ…♪

…情けね…。

だが、俺はやると言ったらやる！

カーテンを乱暴に引き空ける。

幸いにも（？）音の元凶である車も兄ちゃん（おっちゃんじゃない）がったんだ…）も、俺の部屋から見える位置に居た。

どうやら隣のやたらと庭の大きな新築住宅に引越らしい。

因みにだが、俺の部屋は二階の南東向きに位置している。

父さん曰く、人間はお天道様の光を浴びて起きるのが一番らしい。だから妹の鈴の部屋も俺の隣の南東向きだし、父さん達の寝室も一階の南東にある。

何を言いたいのかというと、道路に面する玄関側（これも因みにだが、鈴の部屋は裏庭側だ）の俺の部屋からはお隣さんの玄関やら庭がそっくり見えるという事を言いたかったんだ。

そしてカーテンを開けてCMでよく見る引越し会社のロゴが入った大型トラックと揃いの作業着で荷物を降ろして、隣に搬入している兄ちゃん達（マツチョで茶髪ばかり）を睨みつけようとした俺は見てしまったんだ。…美しい物を…。

その女の子はお隣に引越してきた子だろうと思う。

次の瞬間には俺の視界にはその一人の女の子しか居なくなった。
…いや、正確には睨みつけようとしたトラックと引越屋の兄ちゃん達やお隣の家やその後ろに広がる少閑町しょうかんちょうの新興住宅街が広がってるんだが、俺の視界の真ん中には女の子が居て後は只々白いバックが広がるだけだった。

最初は逆光だから影だけだった。それでも綺麗な女の子だと思っただ。

シルエットだけで麦藁帽子とスカートを着ているのが解った。
一枚のモノクロの絵画みたいに見えた。

段々と目が慣れてくるとそのモノクロの絵画に徐々に色が付き出した。

まず目に飛び込んできたのは亜麻色だった。

五月の風にそれはふわふわと揺れていた。

最初は羽根だと思った。…人に羽根なんか付いているわけないんだが…。

よく見るとそれは髪の毛だった。でも羽根と言われても俺は本気で信じていたかもしれない。

着ている白いワンピースは聖歌隊の着ている法衣のようにも見えた。

そう、それはもう天使といっても過言ではない装いだった。

勿論、装いや艶やかな髪の毛だけじゃなく、ぬけるような白い肌、形の良いツンと形良くとがった鼻、大きなハッキリとした垂れ目、気味の目に南の海のような瞳、桜色花びらのような可憐な唇と容姿もアイドルや3DCGアニメのヒロインのように美しかった。

背は160前後だろうか、ほっそりとした体に何故かボンツ！と存在感を示す胸。

車から出て肌寒かったのか、足下に置いていた大きめのトートバックから紺色のカーディガンを出して羽織った。

その動作の一連でもそのたわわな胸が揺れている。

…いや、揺れていらつしやいます。

…ほら、だって俺って“男の子”だもん…！

俺は寝起きのボーツとした気分も、微睡みを邪魔された怒りも、八つ当たりに睨みつけようとした事も、全て南億光年もの向こうにすっ飛んでいた。

何時の間にやら俺は窓を開けて窓枠を掴んで上半身を乗り出し穴が空くほどその美女を見つめていた。

その時、気紛れな五月の一陣の風が吹き抜け、麦藁帽子を吹き飛ばし家とお隣さんの境目まで転がってきた。

慌てて麦わら帽子を追いかけてくる女の子。

勿論、俺の視線はその女の子の走って揺れるむ…こほん…姿を追っていた。

女の子は帽子に追いつくとぱたと叩いてまた頭に被る。

不意に、そう不意にだ。女の子は上を、俺の方を見た。

勿論、目が合う。

ちよつとエメラルドグリーンの瞳が驚きに見開かれ…。

笑ったんだ。

そして辿々しくぺこりと頭を下げると、くるりと反転し小走りにお隣の家に入っていた。

小走りの途中で足下に置いていた鞆をすりりと掴んで行った時に転び掛けたのはご愛敬だ。運動神経は良くないらしい。

俺はそんな様子を、唯々見ていることしか出来なかった。

だって俺の心には一輪の大輪の華が咲いていたからだ。

その華の名は“恋”だ。

一目惚れだった。

俺は昼飯を呼びに来て無視されて腹を立てた鈴に回し蹴りをくら
うまでそのままだった。

初見

その日、俺はずっとフラフラとしていた。

朝のお隣さんの笑顔のせいだ。…いや、おかげだ。

そして偶に思い出し笑いをする。

その様子を見て俺に回し蹴りをキメた後、まだ夢心地の俺から事情を聞き出した鈴は「…キモい…」と言い、母さんは「病気かしら？」と心配し、父さんは「…青春だな…」と呟き縁側でパイプを吹かしていた。

外野の言葉なんかどうでもいい。俺は幸せだった。あの笑顔で胸もお腹もイッパイだった。…嘘です。腹は減ります。

夕飯の食卓に座っても俺は前後左右フラフラと揺れ、時折ニコリと微笑んで（鈴曰く、気持ち悪くニヤツいている）いた。

そんな俺の様子を鈴は配膳しながら時々自分の体を抱きしめて震えている。

どうやら気持ち悪いらしい。

…俺が…。

母さんは肉じゃがを鍋から鉢に盛りつけながら俺を無視していた。鈴から俺がこうなった理由を聞いて、「あら…」と言って放っておくことに決めたらしい。

…鈴の奴め、事情を言っちゃった後に正氣に戻って言いふらさないと約束させたのに…。

何故愛おしい兄との約束を破るのですか…。

…愛おしくないからですね…。

父さんは藍の甚平姿で椅子の上に器用に胡座を組み、食卓の対面の俺をチラチラ見ながらチビチビと晩酌をしている。鈴から事情を聞いて俺の様子が気にはなるらしいが何と言って良いのか解らな

いらしい。

父さんと母さんの出会いも父さんの一目惚れだったらしいと過去に聞いた記憶があるので、俺の唯一の理解者かもしれない。

…母さんに内緒で明日にでも徳利にお酒を少し足しておいてあげよう。

……俺の思考を読んだのか、俺を無視することにしていたはずの母さんが俺を一睨みした。

……母さん、何時から貴女は超能力者になったのですか…？

そんな葛葉家の平和な団欒（？）風景に訪問者がやって来た。

ぴんぽーん…

「はい！鈴、味噌汁お願いね！私が出るから先に食べてて！」

母さんは各自のご飯を食卓に並べ割烹着を手早く脱ぐと、椅子にそれを引っかけて玄関に小走りで行ってしまった。

「…しょうがないな、それじゃあ先に頂くか…。
いただきます」

父さんは徳利を二、三回振って最後の滴までお猪口に注ぎ、それをクイツと煽ると両手を自分の目の前で両手を合わせた。

通常、我が家は全員で食卓に座り手を合わせるのが家訓というか掟というか…、兎に角決まりになっている。

父さんの動きに合わせ俺も鈴も手を合わせる。

俺が手を合わせている前で湯気を上げている鈴がよそってくれた味噌汁には、何故か具が入っていないようだ。

具が少ない味噌汁かと思ったが、父さんや鈴のお椀にはお揚げやジャガイモや葱がたっぷり見える。

…中々気の利いた嫌がらせだ…。

男が食いものに愚痴々々言つなというのが父さんの教えだ。

…うん、後でおかわりしよう…。

そんな俺がご飯を一口食べて味噌汁を一口啜った時だった。

玄関から俺を呼ぶ母さんの声が聞こえた。

「匠、ちよつと来なさい！」

お客さんよー！」

俺に客？

俺は父さんと鈴と交互に顔を見合わせた。

「匠、お客さんを待たせちゃいかん。

早く行きなさい」

父さんは塩鯖をムシりながら俺を促した。

「…ああ、行ってくるよ」

俺は困惑しながら汁碗を食卓に置き、さらにそのうえに箸を置く
と玄関に向かった。

背中越しに鈴の安堵を表すらしい溜息が聞こえた。気持ち悪い俺
の姿を見ながら飯を食わずに済んだかららしい。…兄の妄想にまで
文句をつけないでもらいたいもんだ。…まあ、妄想を全面に押し出
している俺の方に問題があるかもしれんが、若気の至りということ
で許してほしい…。

……無理か……。

俺は報われない俺の人生を憂い（自業自得かもしれないが気にしない）、鈴に聞こえないよう小さく溜息を一つ吐くと頭をがりがりと掻きながら玄関に顔を出した。

「こんば……」

挨拶の途中で俺は固まってしまった。

だって妹に気持ち悪がられた理ゆ……いやいや、俺のハートを射抜いた本人が目の前に居たのだから。

そう、あの朝の亜麻色の御髪の美人さんだ。

今は肌寒いのか淡いピンクのスプリングコートを羽織っている。

……メツチャ綺麗……♪

「今晚は。

そして初めまして。

今日、隣に引っ越してきたイリーナ・フォルムングと申します。どうぞ宜しくお願いします♪」

……うわー、滅茶苦茶綺麗だし、……声も綺麗だし、日本語も綺麗だし、……でも近くで見ると、以外と幼く見えるぞ……？、……高校生位かな……？、……ああ、何か素敵な香りがする……。

俺は玄関に繋がるリビングの入り口から顔を覗かせたまま、興奮と多幸と膨らむ妄想のあまり彼岸に旅立とうとしていた。俺の様子が変な事にイリーナ・フォルムングさんは小首を傾げた。

……はっつ、その仕草もかわええの……。

パンッ！！

「ほらっ、ぼくっとしてないで、匠もちゃんと挨拶なさい！
御免ねフォルムングさん、家の馬鹿息子が礼儀知らずで…」

柏手（？）一発で曾祖父ちゃんの所に船出しようとした俺の精神を正気に戻すと、母さんは苦笑しながら玄関に佇む美少女イリーナさんに頭を下げた。

「いえいえ、こんな時間にお邪魔した私が悪いのです、佳織さん。
それと、私は家族からリーナと呼ばれているので佳織さんもファミリーネームで呼ばずに気軽にリーナとお呼び下さい」

「あらそう？

じゃありーナちゃん、改めて宜しくお願いします」

…ほら匠、何時までボヘラッとしてないで挨拶、挨拶！」

母さんは俺につかつかと歩み寄ると、俺の耳を引っ張り廊下に引きずり出した。

イテッ、イテテテッ！！…ったく。

いつもならここで愚痴の一つでも言うところだが、惚れた女の子を目の前にしてそんな女々しい事が出来るわけもなく、温和しく挨拶することにした。

「…こ、今晚は。

葛葉 匠です。

…あの、その、よ、宜しく…」

「…何緊張してんのよ。」

「いっちょまえに色気付いちゃって♪」

「…鈴に報告ね…♪」

最後の方に何やら聞き捨てならない事を呟いている母さん。

「…おいおい、息子の家庭でのヒエラルキーを下げて何が楽しいんだ、母よ…。」

ゴシップ誌の記者のようにニヤつく(全国のコシップ誌の記者の方、ごめんなさい。完全な妄想発言です)母を無視し、何故俺がこの場に必要なのか訊ねた。

家族に紹介するなら父さんや鈴も呼ぶはずだからだ。

「…何だろ？」

「…あの、イリーナ・フォルムングさんが俺に用なんですか？」

「匠さん、私もお名前と呼ばせていただきますからリーナで結構ですよ♪」

「…。」

「…リーナと呼んで良いんだって♪良いんだって♪♪
再び旅立ちそうになる俺を母さんのジト目が妨げる。」

「…いかんいかん、このまま我が家のヒエラルキーの低下は避けねばならない…。」

早く内容を聞いてしまわなければ！

「…でもこの時間が永久に続けばいいのに…。」…あと、母さん居なくなればいいのに…。」

「…！母さんが俺を睨んだ！

本当に超能力者じゃないのか？

俺の安全が危ないので話を早く進めよう…。」

「…でリーナさん、何でしょう？」

「匠さんは少閑学園の高等部二年生だと佳織さんから伺いました。実は私も明日から少閑学園の高等部に通うので、馴れるまで一緒に登校して頂けないでしょうか？」

「…私、あの、す、凄い方向音痴なんです……」

「…何この可愛い生物…」

頬を赤らめ視線を下に落として手をお腹の前でモジモジ。

「…何この可愛い生き物…」

しかし願ってもない。こんな美人と一緒に登校できるなんて最高だ！

「わわ、わ、解りました！」

あの、喜んでお迎えにあがります！

その、その、明日の朝八時に出発で、ごほっ、いいいですか？」

「…舞い上がり過ぎよ、ばか…」

母さんの言葉なんか聞こえない、聞こえないったら聞こえない！

「ハイ、ありがとうございます。」

宜しく願いますね」

フフッ」

そんな喜ぶ俺と問題が解決し嬉しそうに笑うリーナさんに母さんが茶々を入れる。

「リーナちゃん、こんなんだけどいいの？」

俺を指さしリーナさんに詰め寄る母さん。

…失礼な、実の息子を信賴して下さい、お母様。

ほら、この澄んだ瞳を見て下さい。…白目の所は興奮で充血して
ますが…。

「実はご近所のどなたかに頼もうと思ったのですが、少閑学園高等
部に行かれているのが葛葉さんの所の匠さんだけだったので…」

…消去法ですか、リーナさん…。

「…そう、それならしょうがないわね。

匠、一緒に行つてあげなさい。

…変な所に連れ込んで変な事しちゃ駄目よ」

…母さん、貴女の瞳には可愛い我が子はどのように映っているの
ですか…？

何だか言いたい事が満載（主に母さんに）だが、まあいいや。下
手に反論して少閑学園小学部に通う鈴に案内の任務を横取りされた
らたまらない。

小学部は高等部から一区画離れているが、五分も早く家を出れば
鈴でも案内は可能だ。

ここは黙っているに限る。沈黙は“金”だ。

「…では夜分に失礼しました。

匠さん、明日は宜しく願いますね♪」

「はい、お迎えにあがります！」

「そんな！こちらがお願いしたのですから、朝はこちらがお伺いし

ますわ」

「いえいえ！これでも紳士ですからお任せください！」

「あら、そうですか？

フフッ、それではお言葉に甘えて…。

匠さんて親切なんですね♪

では失礼します」

ぎこちないお辞儀を一つすると、リーナさんは帰って行った。

「…匠、リーナちゃんのお家の間取りを調べたり、盗聴器をしかけたり、部屋から盗撮したら駄目よ…。

信じてるからね？」

「…いやいや、信じている息子に言う台詞じゃないよね？ないよね？不満顔の俺を余所に母さんは俺の肩をポンツと叩く。

「さっ、ご飯食べちゃいましょ♪」

母さんはサッサとリビングに歩いていった。

…何だかな…

お隣さんは秘密結社！？

工^{こう}井^い手^て予^よ市^し少^{せう}閑^{かん}町^{ちやう}は十数年前まで過疎に悩む小さな農家が幾つかが寄りよっているような小さな町だった。

だが世界にその名を轟かせる國枝重工の広報課課長、長野忠治氏（アメリカの超有名経済誌「マネー」で世界のリーダー百人に選ばれた傑物だ）が“物造りの日本の名前をもう一度世界に知らしめる”という突如掲げたプロジェクトのため、日本だけでなく世界中の職人を集め（この時点で物造り日本の意義が無くなったと俺は思うのだが、世界の誰も突っ込まなかった。「俺が白と言えば黒でも白と言え」を地で行っているのだろうか？）社員に職人教育をさせつつ、高度な技術のワンオフ製品を世界相手に商うというその教育の場であり製作の工房である場所を少閑町に選んだ事で後にこの町は劇的に変わることになる。

世界中の名工と呼ばれた老練な職人や安い労働力やハイテク機械の大量生産の怒濤の波状攻撃に耐えていた職人や若く希望や野望をその胸に抱いた職人等々、数人の様々な分野の職人達がこの計画に希望と未来を求めて集まった。

最初は「世界で五本の指に入る大企業がトチ狂ってバブルの時のようにジャパンマネーを無駄に使い出した」とか、「世界から見た自分を知らない愚かな日本人と金の亡者の職人達」とか、「國枝重工のカレンダーは一年中四月一日」とか、日本国内どころか世界中のマスコミの物笑いの種になっていた。

ところがそんな騒ぎも収まって人々の記憶から少閑町という言葉すら忘れ去られた八年後、その数人の職人達が世界の度肝を抜いた。正確にはその職人達の作った一機の飛行機にだが…。

それは唯の飛行機じゃなかったんだ。

——高々度旅客機——。

次世代の航空機のことだ。

大気圏外に一度出てもう一度大気圏に突入するというICBM（大陸間弾道ミサイル）のような軌道を描く飛び方をする。

メリットは空気抵抗のない所を飛ぶため飛行時間の大幅短縮が出来ること。東京―ワシントン間を二時間程度、東京―ロンドン間を三時間で飛べる物らしい。

デメリットは開発コストが莫大なのと大気圏内と大気圏外を飛べるエンジンが必要（最終手段として二種類のエンジンを積めば良いかもしれないがそれもコストを引き上げる要因になる）なのと運用コストが現行の航空機よりかかる事。

その他、細々とした問題はあったが要するに“お金”と“人”だ。過去いろんなアメリカや日本やロシア（昔はソ連といったんだっけ？）や中国など、名だたる大国が湯水の如く大金と人員とを使い、時には何力国で合同で開発に尽力しては頓挫してきた物を一企業の新興部門と数人の職人が事も無げに成し遂げてしまった。

おまけに主なデメリットであるお金の問題を全てうつちゃったのだ。

例えばその旅客機の表面を覆ったのは、煉瓦職人や瓦職人が國枝重工から与えられた一般的な耐熱素材をこねくり回して造った耐熱タイルだ。

機内の気密性を守るのが和紙職人が梳いた特別な（特別な素材を使っているといっても、これも一般に出回っている安価な物らしい）和紙だった。

フレームや翼に至っては鍛冶職人と木工職人（宮大工や欄間などを手掛ける欄間師や木工彫刻家）の合作の木と金属のハイブリットで出来ているという始末。

航行管制コンピュータ等の電子部品の一部や既存のジェットエンジンの供給を國枝重工の航空機部門開発課や宇宙開発部などからしてもらったものの、高々度旅客機のほぼ八割を職人さん達が手掛け

た安価な材料で完成させた。

ここまでの話で誰もが大きな疑問を持つだろう。紙や木材なんかで出来た飛行機が飛ぶなんて、第二次世界大戦末期の零戦じゃあるまいし、ましてやそれが宇宙空間を飛ぶなんてかなり無理じゃね？
って話だ。

歓声と驚愕と罵声とその他諸々（主に負のベクトル）の感情が飛び交った完成披露から二ヶ月後、人類の大方の予想を裏切り、高々度旅客機「いよっつ」日本一号」（ネーミングセンス、無え…）は数十回のテスト飛行を何のトラブルを起こすことなくこなし、その実力を世界に知らしめた。

しかも燃料整備コストが従来の同程度の規模のジェット飛行機と同程度というデータのおまけ付きで。

それまで否定的な態度を取っていた国や研究機関や大学や科学者や評論家や知識人を自称する連中も認めざるをえなくなった。

そうなるが始まったのが高々度旅客機「いよっつ」日本一号」の奪い合いだった。

販売はオークション形式で全世界生中継で行われた。

結局、最高額を提示した赤い御旗を掲げる一党独裁の国のとある研究機関が落札した。

…が、その数ヶ月後、その国のとある軍事基地から飛び立った航空機らしき物が日本海の遙か上空で大爆発を起こした。

対外的には新型エンジンの耐久実験で爆発は想定内だったと発表されたものの、全世界の本心の共通認識としては例の「いよっつ」日本一号」の“コピー”の試験飛行が失敗して爆発したのだとなっている。

だがそれを表だって糾弾したところで誰も喜ぶ人はいない。喜ぶ人が居たとしたら、ゴシップ誌の出版社と八割がた捏造記事だと承知しても金を払ってそのゴシップ誌を買う民衆だけだ。

賢い組織達はそれに表だっては触れず（一応、領海内での“自称実験機”の爆発に日本政府は抗議をしたが、何時も通りの弱腰外交だったため蛙の面に小。だった）、國枝重工に接触を謀るのだった。だが國枝重工からの各国や研究機関への公式回答は「今回の旅客機と同様の物は製造致しません。次回の製品にご期待下さい」との素っ気ない物だった。

更にそれから五年。「M a g i c ・ H a n d s」という名称を名乗るようになった職人集団は少閑町から数々の作品を世に送り出した。

水の分子以外は完全に除去する一枚の布状フィルター（逆方向からの水圧で何度も再生可能）とか、極低音の環境から炎の中や高密度の放射線の中でも自由に活動できながらもその衣服の中の空間は快適な密封性作業着（外見もごてごてしてなくて、かなりスマートで格好良い）とか、SF映画とかアニメに出てくるようなボディーツツ状の宇宙服（外見がアニメのコスプレをしているように見えるのはご愛敬♪）等のそれはそれは凄い物から、像が踏んでも壊れないガラスのグラス（何故かワイニングラス）とか完全純物質で外的要因を受けない出目の確率が完全に六分の一のサイコロ（滅茶苦茶重い）とか植物だろうが金属だろうが高密度高分子繊維製の布だろうが人体を始めとする生体組織だろうが全てを色んな色に染める染料（勿論、完全無害で元の物の性質は変化無し）等、訳の解らない変チクリンな物まで色々あった。

それら全ては商品として売りに出したわけではない。

例えば純水を製造する超薄型フィルター、その名も「お手軽、純水作る君」（…センス無え…）は研究機関に販売する以外は全世界の水に困っている国の人達に造水機付きで寄付したし、完全防護服「素敵な無敵さん♪」（…本当にセンス無え…）は消防設備や原発災害や火山地域の設備の整っていない全世界の地域に寄付された（

金の有る国の消防防災関係やケミカル工場関係や原発地域や火山地帯では販売したみたいだ」。

まあ取り敢えず、慈善事業を優先し余ったら売りに出されたそれら全ての品はあつと言う間に買い手がついて売れていった。

…全てと言うからには、割れないワイングラス「頑丈ソムリエ三号」(…何故三号…?)とか、純物質のサイコロ「公平さん」(…サイコロに“さん”付けて…)とか万能染料「君を僕の色に染めてあげる」(…もはや名前でなく、台詞だよ…)とかも売れた…。

商品を買った組織等は、最初は高々度旅客機「いよっっ」日本一号」を買ったあの国のように、その技術を再現できないか色々やっていたようだが結局どの国のどの機関もそれを再現するどころか、解析することさえ出来なかったらしい。

当然、その後の世界の反応は“ほぼ”二つに別れる事になった。

すり寄る者と反発する者。

「M a g i c ・ H a n d s」の恩恵を受けようと國枝重工に接触する国・組織・個人。

「M a g i c ・ H a n d s」に対抗しようと研鑽に励む国・組織・個人。

『人類七十億、総職人時代到来?!』

…当時、とあるスポーツ新聞の一面を飾った見出しだ…。意味不明の表現ではあるが、加熱してしまった現状を表す妥当な表現ともいえた。

…まあ、前置きが長くなったが、こうして我等が少閑町に活気の火が灯ったわけだ。

移住してくる職人とその家族。

それらを相手に商売をしようとした人達。

「M a g i c ・ H a n d s」の秘密を探ろうとした産業スパイなんかもいるかもしれない。

そうなれば当然、町の人口も膨れ上がる。

そんな状況を想定していたのか國枝重工は町自体を、いや地域自体を一から創った。

鉄道・道路などのインフラを整備。

住宅地やマンションや学校や病院や商業施設や娯楽施設までもを作り、住民の生活に支障が出ないようにした。

そして今も少閑町の町創り続けている。

この前、週刊誌で読んだ。

國枝重工の系列会社のニムラ自動車が持っているS県に本拠地を置くプロサッカーチームの本拠地を少閑町のある県に移そうとする計画があるらしい。町の郊外にスタジアムを建設しているので、これはほぼ間違いないだろう。

これが実現したとなると、この周辺の町に及ぼされる経済効果は数十億円になるとその週刊誌に書かれていた。

こんな話をダラダラしといてこんな事を言うのはなんだが、高校二年生になる俺（サッカー部にも入っていないしな）には難しい事は解らない。

ただこれだけは言える。

プレス打ち出し溶接板金旋盤職人（要は何でもやる鉄工職人）の父さんは五年前、この町に来てから楽しそうに仕事の話をするようになった。

前に勤めていた工場では当時住んでいたマンションに帰ってくると、溜息を吐いて酒を飲んで屁をコいて寝るだけだったあの父さんがだ。

だから俺達家族はこの町に越して来て良かったんだって思う。

…さて、この町の歴史はこんなもんかな？

今俺はお隣のフォルムングさんのお宅　の前に居る。

時間は午前七時五十分。待ち合わせの時間の十分も前だ。

…実は七時半からここに居る。張り切りすぎて三十分も早くに来てしまったのだ♪…あはは…。

…さて何故余所の玄関の扉の前で二十分も我が町の歴史を振り返っていたのか？

それは昨日一目惚れしてしまったリーナさんと仲良くなろうという俺の下心丸出しの考えに端を発する。

この何年かで少閑町には外国人の住人が増えた。俺が五年前に編入した少閑学園小学部六年にも何人もの外国人生徒が居たし、その後の五年でも何人もの外国人の転校生（日本人も居たぞ）が来た。そいつ等に共通の認識がある。『日本人は自分の国の歴史を知らない』ということだ。

その事で俺や他の日本人生徒は、外国人生徒から可笑しいと言われ続けた。

非道いときには自国の歴史を知らないとは何事だと叱られさえした。

どうやら諸外国の同世代達は愛国心に溢れ、自分の国に誇りを持ち、その証拠の一つとして自国の歴史を詳しく知っているらしい。

確かに俺達日本人（一部は除くが…）は他国の情報に詳しいわりに、自国の事を知らない。

特に日本史の時間なんかは睡眠時間と同じ意味を持つ（これはあくまで個人の意見だ。それに俺の日本史の成績は平均以上を保っている。…だが、テストさえ終わればその情報はデリートされる。なんて便利な俺の頭）。
過去何度か、一念発起し日本の歴史を知るべく図書館で歴史書な

ぞを読んでみたこともあったが、所詮は生半かな考えを元にした行動でたいした事なので成果を上げることなく昨日に至っていた。

だが俺のリビドー…、もとい恋の炎は凄まじい燃料となり、昨日の一晩で日本史の教科書を読破するだけでなくネットで調べた歴史サブカルチャーを暗記するまでに至った。

凄いで俺のリビドー…コホン…もとい恋の炎。

そして何故二十分も俺が人様の玄関の前で我が町の歴史を振り返っていたのかというと、ただ単にリビドー…もとい恋の炎の暑さで早起きしてしまった時間を利用し近々で必要となりそうな知識を復習していたのだ。

さて復習も終わったし、少し早いが彼女の家の扉を叩いてみるか…？

今時珍しい目の前の木製の扉に取り付けられたノッカーを手に取り、確か正式なノックは四回だったよな？と考えながらノックをする。

コンコンコンコン

「お早うございます、リーナさん。隣の葛葉 匠です。約束の時間より早いですけどお迎えにあがりした。」

ドンガラガッシャーン！！！！

途端に家の中から何かを盛大にひっくり返したような音が響いてきた。…何だ？

「…いたたっ…、お、お早うございます、匠さん…。もうそんな時間ですか？」

ありやりや、リーナさんを驚かせてしまったらしい。

「すいません、念のため十分位早めに来たんですけど…。」

…迷惑でした？

…あと、大丈夫ですか？」

「いえいえ、お気を使わせてしまつて申し訳ありません。

…あの、私まだ普段着で制服に着替えなきゃならないので、少し待つて頂かなくてはなりません。

…もしよろしければ、散らかつてますがお部屋の中で待つて頂けますか？」

何と！初日から彼女のお家に上げていただけるというイベント発生♪

これは行け行けどんどんといきましょう♪

「じゃあ、お言葉に甘えまして…。」

お邪魔しまーす…」

ドアを引く。

『…あと、お手数をおかけして申し訳ありませんが、私をここから引きずり出して頂けますか？』

…何故彼女の声かくぐもっていたのか、ドアを開けて解つた…。

…だつてリーナさんつたら、段ボールの山に押しつぶされてたんだもん。折り重なつた段ボールの山の中腹辺りから、リーナさんの白い右手が見える。

… なんだか、シユール…

… はっ！ いかんいかん、さっさと助けなくては！！

「リーナさん、大丈夫ですか！？」

今助けますから！！」

俺は鞆を放り出し、慌てて段ボール山の発掘に取りかかった。

幸いにも重い荷物が入った段ボールは無かったらしく、どちらかと言うとひ弱な俺一人の力でも簡単に段ボールは退けられた。

五つも段ボールを退かせばリーナさんの体が見えてきた。… だが、その姿を確認した途端、俺は固まってしまった。

散らかった荷物の散乱する中、リーナさんは立ち上がり衣服の誇りをぼんぽんと払うと、呆然としている俺の手を握り感謝の言葉を口にする。

『 いやー、申し訳有りません、匠さん。

助かりました、ありがとうございます♪ 』

… 普通、美少女に手を握られてお礼の言葉を述べられるというのは、ギャルゲーでいうところのフラグが立った（俺はギャルゲーをしない。三次元派だ）というんだろが、俺は依然として固まったままだった。

… だってさ、肝心のその美少女が完全に顔を隠すような黒い三角頭巾をすっぽり被り、黒いマント（ポンチョ？）を羽織っていれば誰でも俺みたいな反応をするだろう？

おまけに頭巾の額に当たるところには金色の刺繍のペンタゴン入りと来た。

… あーっと、ペンタゴンのマークということは取り敢えず白人至上主義者の団体（K・O・K）の方ではないらしい…。

『…あのー、どうしましたか？』

俺の手を握ったまま黒い頭巾の二つの穴からマリンプールの瞳が俺を見上げる。…これは何萌えに分類されるのだろうか…？というか萌える奴はいるのか？

…突っ込み所は満載なんだが、取り敢えず彼女を学校に連れて行かなくては。

「…あーつとリーナさん、制服に着替えなくちゃいけないんじゃないのかな？」

『あつ！そうでした！』

ちよつと待つてて下さい、直ぐに着替えてきますから！』

彼女は俺の手を離すとエントランスダイニングに併設された階段を駆け上がった。いった。

…あつ、マントの裾踏んでコケた…。

お友達になりました♪

俺は床に散らばった荷物を片付けている。

先程リーナさんが埋まっていた段ボール幾つかが開いて、中身が散乱していたのだ。

基本綺麗好きではない俺なんだが、他人様の家の中を不法にキョロキョロと見渡すわけにもいかず、かといってぼけーっとしているにも知らない場所では何だか居辛い。

…小市民な俺。

だが、片付けを始めた俺は今、非常に困惑している。

その原因は俺が今手にしているのはキャンドルスタンドだ。

何というか…、その…、人間の…骸骨…なんだ。しかも、作り物じゃなくリアルな奴。

良くできた作り物だなと内面を見たら医療番組で見た頭蓋骨の構造そのものだった。

軽く叩いてみたがプラスチックなんかとは違う硬質的な音がする。

…うん、何度見ても本物の頭蓋骨を使ったキャンドルスタンドだ…。

よく見れば他にも怪しげな雰囲気醸し出す物がワンサカとある。まず握り拳大の人の干し首。口と両目が縫い合わされているが、何故か小さくモゴモゴと動いている。

…電動の玩具だと思いたいが、手に持ってみた感じでは玩具とは思えないリアルな手触りでした…。

束ねられた枯れ枝みたいなのは、よく見たら蛇の干物でした。

…更によく見たら、蛇の頭が二つに分かれた二頭一身の蛇さん達でした…。

緩衝材で包まれた箱から覗いているのはガラスの容器にはいった

ホルマリン漬けらしき物。…中身は蝶の羽の生えた小さな人…。
フィギアだよね？作り物だよね！？

他にも怪しい草やら水晶球やら鳥の羽やら黒っぽい液体を満たしたの小瓶を沢山入れた小箱（人の頭蓋骨のマーク入り）やら針がハリネズミのように突き刺された人形やら…。

これでほんの一部なんだから、他の開いていない段ボールには何が入っているのか…。

何とか片付け終わった段ボールを積み重ね、俺は深く大きな溜息を吐いた。

…一刻も早く手を洗いたい…。

「あら、片付けて下さったのですか！？
本当に何から何まですいません」

声の方へ振り向くと、階段の中程で辿々しく頭を下げるリーナさんがいた。

どうやら制服に着替え終わったリーナさんが階段から下りてきていたようだ。

…綺麗だ…。

朝日に照らされて階段の中程に佇む制服美少女。

うちの少閑学園の制服は中々に可愛い・格好良い（勿論、着る人間による。俺は、…普通…かな？）と評判だ。

シャツは立て襟のピュアホワイトで前と袖ボタンは青いスワロフスキーガラス、青の紐ネクタイを首元で止めるのは校章をあしらった青と銀のネクタイ止め、濃紺のジャケットの胸ポケットと袖に今時珍しい膝下まであるプリーツスカートと同じ青と白と紺の押さえ気味の感じのチェック柄があしらわれている（男子の場合は当然同

じチェック柄のスラックスだ」。

… ネットの掲示板で見た事だが、一部の制服マニアの間では少閑学園のこの制服（勿論、女子のがね）がかなりの高値で取引されているとか…。偽物も出回ってるから制服鑑定士（…どんな職種だよ…）が大忙しだとか…。

制服に萌えない俺はそんな書き込みを見て眉唾物だと笑い飛ばしてたんだが、今の俺ならそれが解る気がする。

… だって、目の前に小首を傾げて立っている亜麻色の髪と南国の海の色の瞳を持った美少女が、そんな制服に身を包んでいるさまは一枚の絵画に等しかったから。… しかもかなりの名画。

これなら高値で取引されるのも肯ける！ぬうおー、可愛すぎるぞおー！！

「… あのだ、すいません…。私の制服姿って何だか変ですか…？」

… しまった…、俺があんまりじっくりと目の保養をしてたもんだから、彼女に疑問の念を抱かせてしまったらしい。

「… いやいやいや、別に变じゃないですよ！

… あのそれより、聞き難いんですけど、この段ボールの中身って何なんですか？

それにさっきのリーナさんの格好って…？」

思わず聞いちゃいました、俺。

だって気になるんだもん。

「その段ボールの中身は母方の家に代々伝わる家事道具なんです。それにあの格好は家着です。

… だらしない所を見せてしまつてごめんない…」

…何のお仕事なんでしょうか…？

困惑の色が俺の顔に現れたのだろう（顔色を隠すのは苦手だ…）、リーナさんは寂しそうに下を向いた。

「…そうですね…、やっぱり変ですね…。」

変なのは解ってるんです…。でも、母方の伝統なので、私はそれを守りたいだけです。

…だけど、前に住んでいたテキサスでも『お前は変だ』って言われて友達も出来なくて寂しかったんです…。

お父さんの仕事で日本に来たら友達が出来るかなって思ってたんですけど…。

…あれ、…私、何言ってるんだろ…。…あれ、何だか涙が…。

ぐすっ…、ふふっ…、やっぱり…こんな変な私には…友達なんか…出来ないんだ…。」

…リーナさんが気丈にも、笑いながら泣いている。

俺が泣かしたわけじゃない。でも、罪悪感を感じる。…だって俺の表情が彼女の辛い過去を思い出させてしまったのだから。

彼女のために俺の出来る事。同情や慰めなんかじゃなく、本当にリーナさんのために出来る事。

それを本気で考えた俺の体は勝手に動き、口は勝手に言葉を喋っていた。

俺はリーナさんが中程に佇む階段を彼女の元まで駆け上がり、彼女の手を取った。

…うわ…っ、柔らけー！！

そんな邪念が浮かぶが、俺はそんな物をかなぐり捨てて叫んでいた。

「リーナさん、友達になろう!!」

「…へっ…?」

事態を飲み込めていないのか、リーナさんからは素っ頓狂の疑問が帰ってくる。

俺はもう一度、今度は噛みしめるようにリーナさんに語りかけた。

「リーナさん、友達になろう」

「…はい…」

呆けた返事の後、彼女は大輪の華のような笑顔をうかべた。

…うん、女の子は笑ってないよね」

呪うわよ！シャランラ♪（注、効果音）

今、涙をハンカチで拭いて気分を落ち着かせたリーナさんと肩を並べて学校に向かつて歩いている。

俺と友達になったのが（初めての友達だからというのもあるだろうが）余程嬉しかったらしく、鼻歌交じりの上機嫌で俺の隣を歩いている。

そういえば友達になったとは言いながら俺は彼女の事を名前以外何も知らないし、彼女も俺の事を知らないはずだ。ここは学校に行きながら、自己紹介といこうか。

「リーナさん、改めて自己紹介しようと思うんだけど。

…えゝつと、改めまして、俺は葛葉 匠。

少閑学園高等部二年生。

家族構成は「Magic・Hands」のオリジナルメンバーの顧問をしている父さん、創太郎と専業主婦の母さん、佳織と少閑学園小学部六年生の妹、鈴の四人だ」

「はい改めまして、イリーナ・フォルムングです」

今日から少閑学園高等部二年生になります」

家族はドイツ系アメリカ人でビール樽職人のパパ、ヨアン・フォルムングとウクライナからのアメリカ移民の占い師兼薬剤師のママ、リリアナ・フォルムングの三人家族です」

リーナさんが告げた真実に俺は驚愕した。

「…えっ！？同級生！？

…大人っぽいから三年生だと思ってた…」

本気で驚く俺をちらりと横目で見ると、これから悪戯をするような笑みをうかべるリーナさん。

「あら、女性の年や容姿について本人の前でどうこう言うのは失礼だと思えますよ、匠さん」

「…いやいや、ゴメンゴメン！リーナさんがあまりにも綺麗で大人っぽいからさ、その、か、勘違いしてて…！」

リーナさんが非難ぽく言ったのは冗談だと解っているのだが、やはり女性に年齢系の話題はタブーであり、その一言が彼女と俺のラブラブ（予定）に陰を落とすとも限らない。

「ケアは早めに連絡はマメに、注意一秒ビンター発もしくは情熱的なキスを迫られる。女性の笑顔にや気をつける。女性が泣いたら側に居る。」俺のスケコマシの友達がよく言っている標語（？）の一つだ。

こんなところで役にたつとは…！

……役にたっているのか？

「ふふつ、冗談ですよ」

それに綺麗だなんて…。

いやだ、もう」

リーナさんは“いやだ”のところで体を捻って思いつきり鞆を振りかぶると、“もう”のところで鞆をフルスイングした。

「げごっ！！？」

鞆は狙い過たず（？）俺の後頭部を直撃した。

…目玉が飛び出るかと思った…。もしや、これがさっきの標語（

？)の「女性の笑顔にや気をつけろ」って事か?!…以外に役にたつかも…。…今度からメモところ…。

「ああっ!?!ご、ごめんなさい!」

「…いててっ、いやいや大丈夫だから…」

それより、お母さんの占い師兼薬剤師ってさっきの道具の?」

「そうなんです。

母方の家系は古くからウクライナの土着信仰のシャーマンの家系で、占い事をしたりハーブを調整したりするのが得意なんですよ」

リーナさんが我が事のように胸を張る、するとリーナさんの胸もたゆんと揺れる。

…うほっ♪眼福眼福♪

…じゃなくて、これでさっきの妖しい品々も説明が付くな。(本当は説明なんかこれっぽっちも付かないんだが、無理矢理納得した。…世の中には知らなくてよい世界もある…)

「へー、そうなんだ。

じゃあお父さんが職人ということは「Magic・Hands」に呼ばれたの?それとも申請が通ったの?」

そう、國枝重工や「Magic・Hands」の工房には日本中からだけでなく、世界中から「Magic・Hands」の工房に所属したいと、沢山の職人から希望が殺到している状態だ。それら全てを受け入れるわけにはいかず、「Magic・Hands」のオリジナルメンバー(創設からかわっている人達をそう呼んでいる)の推薦か、自己の技術を披露して「Magic・Hands」に所属する許可を得るかしか方法はない。(今となつては超難関で、

競争率十万倍とも五十万倍とも言われている)

「パパは「Magic・Hands」の初期メンバーの一人、宮大工の杉内すぎうち近内こんないさんと昔から親交があつて、かなり前から呼ばれてたらしいんですけど、前の仕事場との契約が残っていたのでそちらを優先したんです。

明日にはママとこっちに来る予定なんですよ。

パパは普段は優しくてユーモアばかりの人なんですけど、仕事の事になると闘牛の牛みたいに一直線なんです。

ママはそんなパパにべったりで「ダーリンと一緒にないとイヤイヤ」とか言ってるんですよ」

「じゃあ家の父さんや母さんと同じだ。

父さんは金属加工工場の社長兼職人長だったんだけど、父さんの作ってた道具を「Magic・Hands」の初期メンバーの彫金細工師ジュアン・カニンサスさんと和鍛冶師あずまの東兼八けんぱちさんが愛用してたのが縁で東さんの顧問として呼ばれたんだ。

父さんは仕事に妥協しない昔ながらの頑固な職人です。

それに母さんも何だか言って買い物の時に父さんと手をつなぎたがるんだ。

「若い頃みたいにしましうよ」とか言つてさ」

「そうなんですか！

じゃあ家と同じですね、うふふっ」

「そうだね、同じだ。

…リーナさん、「職人組」の奴等とも仲良くできるかもな…。」

「しょくにんぐみ？」

俺の独り言が聞こえたらしく、聞き慣れない言葉にリーナさんは小首を傾げ人差し指をふつくら艶やかな唇に当てる。かわええの
」

…じゃなくて、俺はその言葉をリーナさんに解説しようとして…止めた。

「…うーん、詳しい話は学園に着いたらするよ。みんなに紹介するからさ。」

みんな人懐っこい奴ばかりだから、直ぐに友達になれると思うよ」

お楽しみは後にとつといた方が増えるってもんだ」

…だがリーナさんは友達が増えるというそれだけの事実にはテンションメーターが可笑しい方向に振り切っていた。

「とつとつと友達?!

ほほほほほほんとうですか?!」

リーナさんはドモリながら俺のジャケットを掴むと自分の顔に俺の顔をグイと引き寄せた。

…ちょ、ち、ち近いですよ、リーナさん!!

そろそろ学園も近くなり登校する生徒達が沢山居る中で、このリーナさんの行動に周りの人々が“ざわわっ”と沸いた。

『おい、アレ見ろよ』

『朝から大胆よねー』

『男の方は二組の葛葉だけど、女の方は知らねえな』

『メツチャ綺麗な人だね♪人形みたい♪』

『うほッ！？デカイ胸だなッ！
たまらん！！』

『…お前、デカいだけの胸の何処が良いんだよ…』

『でたでた、アツちゃんの貧乳理論♪
ロリコン、ロリコン♪』

『ロリコン言うな！！
貧乳とロリコンは違うわ！』

…周りが何か騒いでますな…。

これ以上騒ぎが広がらない内にこの状態を解かないと！

「ちよつ、ちよつと、リーナさん落ち着いて！！」

リーナさんの両手を解こうと彼女の固く握りしめられた手を握った。

…！固っ！！そんでもって強っ！！

女の子の力じゃない！まるで男子柔道部員に掴まれている気分だ…。そんな見かけによらない力を発揮しているリーナさんという…と…。

「…とも、ふーっ、…とも、はーっ、…ともだ…、ふーっ、…

ともだち…、はーっ、…」

… 大変に大興奮で、目は泳ぎ、頬を赤らめ、鼻の穴が広がり、吐息は荒々しく、……ともかくえらいこっちゃです…。

「リーナさん、どうどう、どうどう、落ち着いてください！
ほらほら、深呼吸しましょうね！

… はい、ひっひっふーっ、はい、ひっひっふーっ、…」

「…と…、ふーっ、…とも…、ひっひっふーっ、はーっ、ひっひっふーっ、…」

俺の説得と深呼吸（？）が効をそうしたのか、少しづつまリンブルの瞳の焦点が合ってきて激しい息づかいも収まってきた。

「…?!ごめんなさい、匠さん！
わ、私ったら何て事を…」

正氣に戻ったのか俺のジャケットから手を離し、飛び退くリーナさん。

「だ、大丈夫、平気だから…。

そ、それより、早く学園に行かないと。

リーナさんは職員室に行かないと駄目なんだろう？

職員室は校舎の一番奥にあるんだ。

さ、さあ、行こう」

「は、はい、匠さん！」

俺は未だに少し頬を薄紅色に染めるリーナさんの隣を先程より早

足で歩きながら、リーナさんの過去に少しだけ思いを馳せた。

…友達が出来るっただけであんなに興奮するなんて、それはそれは寂しい毎日を送っていたはずだ。

こんなに良い子（少し変わってるけど…）なのに友達がいなくて何かの間違いだ。俺の友達をリーナさんに紹介すれば、必ず打ち解けるに違いない。俺はそう思っていた。

…まだ彼女が見せていない一面があるとも知らないで…。

俺は彼女を職員室の前まで送ると自分のクラスである二年二組の教室の真ん中らへんにある自分の席に座り込んだ。

…ほあゝ、ぎりぎりだった。

そんな息つく暇もなく俺の背中から重みが…。

「おっはつよつ、たーくーちゃん♪」

通学路の真ん中で手と手を仲良くつないでたって聞いたけど、それってだあーれ♪」

背中に当たる慎ましい二つの膨らみと大きく元気な声とお日様に干した布団のような匂いで誰だか解る。

「…クー、無い胸が当たってるぞ〜」

「当ててもらえるだけ感謝しなさいよ〜
うりうりほれほれ〜」

喜んで胸をすり付けるその行動は女子として如何なものかとおもいますよ、クーさん…。

そうこうしていると、今度は俺の鼻腔に何やら甘い香りが漂ってきた。

「おはよう、匠君」

僕に内緒でレディ〜と逢い引きしてるなんて、匠君も隅に置けませんね。

しかも見た事無いレディ〜だとか…。

もし宜しければ、ご紹介して下さいませんか？」

目の前の席に金髪長髪碧目の甘いマスクのお兄ちゃんが座る。

一見温和しそうに見える垂れ目の奥の瞳が夜の肉食獣のようにギラついている。…おうおう、ハンターモード発動注中だね…。

「…エロンドくん、彼女は“対象”じゃ無いよ…。

君の目標の大和撫子じゃないからね」

「…何度言ったら解るのですか…。僕はエロンドじゃなくてドロンドなのですよ…。」

今度は俺等三人を巨大な陰が覆う。

「おはようさん、たつつあん、クーちゃん、エロイドはん。
あんさん等はほんまに朝から賑やかやな」

「おはよー、いっちゃん」

「おはよう、東くん。」

それと僕のファミリネームはエロイドじゃなくてドロンドだからね。そこよろしく。」

「あー、はいはい、了解しました、エロスケコマシはん」

「解ってないでしょ?!」

目の前の色男が陰の主抗議の言葉と共に唾を飛ばす。

遅い声の主の方を向くと、逆光で目鼻立ちのはっきり見えないが、筋肉山盛りの山みたいな大男が立っていた。

「おはよう、岩^{がん}さん。

今日も朝稽古？」

「そうなんや、大会も近いからな。かなりきばつとらなあかねや。」

逆光でも解る豪快さで頭をガリガリととかきむしる関西人。ちらつと横を向くとまん丸な団子鼻が見えた。

此奴等三人は俺の友人達だ。

リーナさんに紹介しようとしている俺の“親友”達、「職人組」だ。あつ、職人組つてのは親族が「M a g i c ・ H a n d s」の職人になっている奴の集まりである俺等四人組の事だ。

五年前に転校してきた時から気が合うから一緒に行動してたら、いつの間にか「職人組」っていう愛称が定着してたんだ。

リーナさんも父親が職人だつて言ってたから職人組繋がりだと思つたんだ。」

最初に俺の背後から抱きついてきたのがヤン・クリン（一度本名を漢字でかいてもらったら、中国語辞典にさえ載っていない字だつ

た）、両親が染め物職人の中国の人だ。たまに強行するハードスキンシップが少々問題な女の子。

そして俺の目の前の色男（エロ男とも言つ）はアラン・ドロンド、父親がヴェネツィアングラスの職人だ。日本に来てみたらあまりにも女の子にモテるので、日本女子千人切り（何の千人切りかは言わずもがな…）を目標に掲げるエロエロイタリアン。

そして俺達三人を覆っている陰の主、彼が堺鍛冶師、東 兼八の孫、東 一岩^{いちがん}だ。

柔道部次期主将の呼び声高い、柔道一直線の武道家。

みんなとの会話は英語なんだが、彼の会話だけ関西弁に脳内変換されるのは俺の偏見だからだろうか？（因みに少閑町は外国人移住者が多いため、公用語は日本語と英語、第二公用語はフランス語とスペイン語だ）

…そう言えばさつきリーナさんの握力は、昔、岩さんとひょんな事から喧嘩になったとき胸ぐらを掴まれた時の感じに似ていたかも…。よくよく考えたら、あの時の岩さんの手は何とか振り払えたから、単純握力なら岩さんよりリーナさんが上かも…。

それにちよつと（かなり？）変わってる（彼女の家の“例の物”を含めて）から、みんな友達になってくれるだろうか？

そう考えたら俺の口は自然に動き出していた。

「あのさ、今日二年生に転校生が居るんだ。

その子、俺の家の隣に昨日引越して来て、今朝学校に案内する間に友達になったんだ」

「その子がたつちゃんと通学路で手をつないでいた女の子？」

クーがやつと俺をハードスキンシップから解放して、自分の机に座ってそばかすが目立つ頬をかいたり短か目の癖毛をいじったりしている。

「そうそう」

「そのレディ」は俺好みの大和撫子かい？」

椅子に逆座りしてハンターモードの目で俺を見つめるエロエロ魔人ドロンド君。

「違っって言ってるじゃないか、エロ視線痴漢君」

「なんだ、違うのか。がっかりだよ…。」

…って言うか、俺のファミリィネームの原型無いじゃん!？」

何やら考え事をしていた岩さんが低い声で口を開く。

「… たつつあんがわざわざそないな事を言うちゅう事は、訳有りなオナゴちゅうことやな…?」

「俺の抗議は無視なのかい!？」

突然立ち上がり演劇じみたポージングで俺を見つめるエロエンガチヨ男ドロンド君。…うん、放置プレイの方向で…。

そして、さすが岩さん、鋭い…。

「… 実は今朝友達になったんだけど、俺が初めての友達だっ言っ
て嬉し泣きしたんだ…。

そんな子でもって何だか妖しい物をいっぱい持ってるんだ。

…それに怪力だったし…。

そんな子でも友達になってあげてくれる?」

「勿の論だよ」

「レディ」と友達になるのはやぶさかじゃないよ」

「安心しいな。たつつあんの友達はワイ等の友達や。」

「ほんで、何組に来るんや？」

三人三用の良い返事を即答で頂きました。友達って有り難いね、
だが何組に来るのかまでは解らない。

「一緒に職員室に入れば良かったかな？」

「いや、そこまではちよつと。」

「ってマンセー先生が来た！」

そうこう言っている内にショートホームルームの時間が来たらしく、担任のマンセー先生こと船満ふなみつせいし誠司先生が教室に入って来て教卓に立つ。

みんな駆け足でガタガタと自分の席に座る。

岩さんは窓辺の席に去っていった。因みにドロンド君は俺の前だし、クーは俺の真後ろの席だ。

さて、教壇に立ったマンセー先生、土日の休みを挟んでも相も変わらずの北〇鮮顔だ。（…二日で人の顔が激変する方が問題かな…）
細い細い目で教室の全体を見渡す。そして一呼吸おいてマンセー先生のおちよぼ口が開く。

「おはようー！」

『おはようございますー！！！！』

この先生、見た目はアレなんで取っつきにくい感じがするが、指

導熱心で情に厚く冗談にも理解が有り生徒からの人気も高い。

だからマンセー先生とあだ名を付けても怒るところか「俺の顔にピッタリだな」と大笑いしていた。（因みにそのあだ名はクーさんがつけた）

さて、そのマンセー先生は何やら教室の入り口をチラチラと見ている。

…まさか…♪

「さて、出欠を取る前に転校生を紹介する。
入りなさい、イリーナ・フォルムングさん」

『…はい…』

やった♪リーナさんと同じクラスだ♪

カ拉里と戸が開き、リーナさんが教室に足を踏み入れる。

…あらあら、緊張しているのがモロ解りの歩き方だ…。…ロボットみたいにギクシャクしている…。

だが、あの美貌だ。教室中で小さな歓声が幾つもあがる。
後ろの席のクーが俺の背中をシャーペンでつつきながら囁く。

（あの子だよな♪）

…いや、そうなんだけどね。シャーペンの先で人をつつくのは止めようね、クーさん。ちくちくと痛いよ…。

前の席のドロンド君がチラチラと俺の方を振り返りながらニヤニヤしている。さらに俺をからかうようにドロンド君が頭を揺らして自分の金色の長髪を揺らす。…目障りだから根本から切っちゃおうかな…？

どうやら俺がリーナさんに惚れていると直感で感じ取ったらしい。
…当たってるんだけどね…。

窓際の席の岩さんまで俺を見て目を細めながら分厚い唇から歯を剥き出しにしてニヤニヤしている。…あつ、岩さんたら小指を立てた…。…たしかに当たってます…。

…俺の表情ってそんなに解りやすいのかな…？

シャーペンの先でつつかれながら（くーがまだやってる）小さく溜息を吐く俺を余所に、リーナさん挨拶が始まる。

「イ、イリーナ・フォルムングです！リーナと呼んでくださーい！宜しくお願いしמוש！」

…リーナさん緊張し過ぎ。“מוש”は駄目だよ、“מוש”は…。俺は心の中で駄目出しをしながらリーナさんに苦笑した顔を向ける。

途端にリーナさんは俺を見つけ、緊張顔を少し緩ませ笑った。

うんうん、かわええの〜

「えーっと、イリーナじゃなくて、リーナさんの席は窓際の一番後ろで良いかな？」

マンセー先生が空き机の中から適当な一つを指さす。

「はい！」

顔見知り（俺の事ね）を見つけ、やや緊張が解れたのかリーナさんは足取り軽く後ろの席に向かう。

…だがここで事件が起きた。

「きゃっ!!」

転校生の席も決まり、出欠簿を手にしたマンセー先生に皆が視線を向けた時、リーナさんの絹を切り裂くような悲鳴が教室中に響いた。

みんなはマンセー先生を見ていたが、リーナに手を小さく振っていた俺は見た。

彼女が横を通った時、一番前の席のこのクラスのもう一人スケコマシ、かめや あらた 亀家 新の手がリーナさんのお尻に手が伸びるのが見えた。

この野郎!!

一瞬で頭が沸騰した俺が叫ぼうとしたとき、リーナさんの低い声が響いた。

「妾の尻は堪能したかえ、下郎」

…へっ…?

「…あつ、いや、あの…?」

狼狽える亀家君。…そりやそうだ。だって目の前で気弱そう悲鳴をあげたじよせいが、人格が替わったように自分の尻の具合を訊ねたのだ。狼狽えない方がどうかしている。

「妾の尻を堪能したかと聞いておるのだ、下郎」

再び響くリーナさんの低い声。声量は変わらないが、声の重みが幾分か増している。「な、な、な、何だよ…?! 言いがかりだ! 何

言ってんだよ!?

手が当たっただけだろう?!」

慌てて反論する亀家君。

艶々の黒髪を頭の後ろで纏めているすっきりイケメンの亀家君。
バスケット部に所属し、彼個人のファンクラブもあると聞く。

彼の人となりの説明するには俺の目の前に座るアラン・ドロンド
という人物と比較するのがうってつけだ。

一言で言うなら、ドロンド君が白のスケコマシ、亀家君が黒のス
ケコマシ。

彼の周りにあまり良い噂は聞かない。お付き合いしている女性の
裸の動画（隠し撮り風味）が動画サイトにアップされた、自分のフ
ァンの女性に猥褻行為をはたらいた、ファンの女性を唆して更衣室
を隠し撮りさせた、e t c . e t c .。

更に極めつけとして柄の悪い連中と連んで、カラーギャング「キ
ング・バーミリオン」というチームを作っているらしい。わざわざ
“らしい”という言葉が付くのはその黒い話が噂だけの話だから。

亀家君が狡猾なのかどうかは解らないが、「キング・バーミリオ
ン」というカラーギャングは犯罪証拠なんかだけでなく実体自体が
掴めなくて変な噂だけが先行し少閑学園サイドや警察もやきもきし
ているらしい。

そんな亀家君だから、まさに見た目気弱そうでおまけにガチガチ
に緊張しているリーナさんをあのタイミングで狙ったんだろう。

あんなに気弱そうなら文句を言いそうにもないし、言ってきたとこ
ろで体が当たったんだと言い張れば亀家君の言い分は通るだろう。
いくら黒い噂があろうとも噂はあくまで噂、亀家君は表向きは少し
女性にだらしのない優等生なのだから。

おまけにタイミング的に全員の視線はマンセー先生の方に向いて
いた。

俺も転校生がリーナさんじゃなければマンセー先生の方を見ていて犯行を見逃していただろう。

…でもわざわざリスクを犯してまでこんな事するなんて、かなり変だよね？…リーナさんの美貌にトチ狂ったか、亀家くん…。

「ほほう、我が尻を触っておいて、知らぬと申すのか？」

「…当たり前だろ！ちよつと綺麗だからって自意識過剰なんじゃないのか！？」

あれこれ俺が考えている内も、まだまだ続いていた押し問答。

「…ほう、まだシラを切るのかえ。

…ならば…『真実を話せ』」

…なっ！？リーナさんの言葉の“重圧”があがつた！？

唯でさえみんなの意識を釘付けにするような腹の底に響くような存在感のリーナさんの声にそんな“力”が乗ったなら…！

…怖っ！！（…ガクガクブルブル…）

だけど、亀家君ったら何だかどこぞの国の民族舞踊のように身をクネらせる。

リーナさんのプレッシャーに前衛的なダンスで対抗しようとしているのか？

…？何だ？何だか口を押さえようとしているみたいに見えるけど…？

「…あつ、…がつ！？」

…あのタイミングなら誰も見てないと思いました。だから転校生のお尻を触りました。気弱そうだったし、緊張してたし。反論されて

も体が当たっただけだと言えは問題ないと思いました…。

…なっ、あっ、へっ!？」

…あらら、亀家君ったら自白しちゃいました。しかも、えらくすんなりと。

すんなりいき過ぎていて自白した本人の亀家君も目を白黒しています。ついでにクラスみんなとマンセー先生の目も白黒。

何だこの状態？

「ほっれ、妾の尻を堪能しておるではないか。

…ところで、物には対価という物が存在するのは知っておろう？
それで貴様、妾の尻は幾らかえ？」

「…えっ…？」

「妾の尻を触り、妾を不快にしたこの対価は幾らかやと聞いておる」

「…あっ、いや、その…」

「ふむ、決められぬというのかえ。

…ふむふむ、それに妾に払える物は何も無いという幸薄き顔をして
おるの」

「…ななな何だよ…」

「よいよい。下郎は無理に理解せずともよい。

…そうよの、下郎が不幸に苦しむ顔を拝み、楽しませてもらう事で
妾の尻の対価といったそうか」

何やら勝手に考えて答えを出したリーナさん。制服のポケットを何やらゴソゴソ。

黒い液体の入った小瓶と何やら棒状の物を取り出した。小瓶の蓋を開け、おもむろに亀家君の頭から問答無用でぶっつけた。ええ、そりゃあもう遠慮無くドバドバと。

「ひゃー?!」

顔や白いシャツを灰色に染めながら、生娘のような悲鳴をあげる亀家君。

…っていつかあの小瓶ってリーナさんの家にあった髑髏マークの箱に入っていた、あの小瓶?!

「…ディーガン、ディーガン、ディーガンセーカン。

ディーガンセーカン、セーカン、セーカン、ディーガンサー。

サーサド、サーサド、ムーダンガー…」

何やらブツブツとリーナさんが呟く。

変化は直ぐに訪れた。

まず、リーナさんの持っていた棒状の物がくねくね動き出した。

…あれ?あれってリーナさんの家にあった双頭の蛇の干物だよね?

…っていつか、何で干物が動くの?

更に亀家君の体に付いた液体がどんどん蒸発(?)し霞のようになって教室の天井を漂う。

…そしてリーナさんが呟くこと暫し。

二度目の変化が訪れる。

くねくね動いていた干物がリーナさんの手を放れ、ぴょんと天井に漂う靄に突っ込んだ。…蛇って飛べたっけ?…というか、干物って飛べたっけ?

双頭の蛇は霞の中で音も無く碎け散り、霞は亀家君の口と鼻の孔

に吸い込まれて始めた。

亀家君が慌てて顔の下半分を手で押さえているけど、そんな事は関係無いようにドンドン入って行ってます。ええ、そりゃまあドンと。

まもなく亀家君の体に全て霞は入ってしまいました。

後に残ったのは馬鹿みたいに口と目を見開いているクラスのみんなと顔の下半分を覆ったままの亀家君と満足げに亀谷君を見下ろすリーナさん。黒い液体をぶっかけられた亀家君の頭や制服は液体の後も形も無い。

「安心せい。此度の呪いで死ぬ事は無い。今日の日が暮れば呪いが解ける。

それまでに妾の尻を触った対価たる不幸を満喫するがよい。

ほーっほっほっほっほっ……」

手の甲を口に合てお上品にマンセー先生に指し示された自分の席に向かい、すんと座る。

途端にピタリと止まる高笑い。

……教室が静かだねー……。

「……あの、あの、しゅ、出席を取ります」

とても珍しいマンセー先生の腑抜けた声が教室にこだました。

…何故に悲鳴が聞こえるの？

夕焼けの中、リーナさんが俺の三步後ろをとぼとぼと歩いていった。例の出来事が起こった彼女の転校初日の夕方である。リーナさんの表情はずっと暗い。

…まあ、そりゃあそうだよな。転校初日のトッパチにあんな事になっただから…。

リーナさんは亀家君に“呪い”をかけた事を覚えていなかった。
…というか教卓から自分の席に行くまでの記憶がすっぽり抜け落ちているのだそうだ。

…二重人格かな…？

少し前に鈴がそんな本を図書館から借りて読んでいた事を思い出した。まだ借りているかな？ 帰ったら聞いてみるか…。

「…どうして…匠君は私を、…その、き、気持ち悪がらないんですか？」

歩きながら考えにふける俺に背後から声がかかる。

振り返ると十歩ほど後ろにリーナさんが立ち止まっていた。俯いた彼女の肩が震えている。亜麻色の髪に隠れて彼女の表情は見えない。

「…あー、えーっと…」

リーナさんがそう言う訳は解っている。今日の朝の出来事の後、リーナさんに話しかける奴どころか近づく奴さえ居なかったからだ。彼女は今日一日、まったくの孤独だった。

… 勿論俺は気にせず話しかけた。でも友達になってもいいと言ってくれたドロンド君やクーや岩さんさえリーナさんに近付くの気味悪がった。三人には「少し様子を見たい」って言われた。

… 俺は何も言えなかった…。無理強いは出来ない。あんな事の後だからな。

でも俺だけはメゲずに彼女に話しかけ続けた。ショートホームルの後、休み時間毎、昼休みと時間の許す限り。

放課後、部活をサボり彼女と一緒に帰ろうと誘いもした。

… だからこうして彼女と一緒に帰っている訳だが…。
さて彼女の疑問に何と答えるべきか…。

「… あのさ、友達友達を気持ち悪がるものなの？」

「… へっ？」

俺の返した言葉にリーナさんは驚いた表情の顔をあげた。… 疑問に疑問で返答しちゃったけど、俺変な事言っていないよな…？

… まあ、周りからは綺麗ではあるが薄気味悪い転校生、… いや、綺麗であるが故に気持ち悪さが引き立つ転校生に話しかける変な奴と思われてるかもな…。

惚れた弱みと言えばそれまでだが、俺の今の気持ちを伝えてあげる事でリーナさんの学園生活が少しでも楽しくなるなら、多少変な奴と思われたって俺は平気だ。

… まあ、あくまで“多少”だが…。

「俺は今朝、リーナさんに友達になると言った。

… 今朝の亀家君との事、正直驚いたけどそれで友達を止める理由にはならないよ。

むしろリーナさんは、あのいけ好かない亀家君の非道な行為にお仕置きをしたんだ。他の奴は知らないけど、俺はスッキリしたよ」

亀家君の“あの後”を思い出しながら俺は苦笑した。

あの後はそりゃあ非道くて可笑しくて面白い状態だった♪

まずはショートホームルームの後で何故か落ちていたバナナの皮を踏んですっ転んでいだ。

トイレに行けば亀家君の使った蛇口だけが壊れて彼は濡れ鼠になっていた。

昼休みに食堂に行けばバスケット部の部長が転んで落とした熱々カレーの皿を頭から被っていた。

終いには学校に侵入してきた野犬の群に彼だけが襲われていた。

今もびくびくしながら部活に励んでいるだろう。…うけけっ♪

後はバスケットボールでも頭に直撃すればいい気味だ♪

「……あの、私の話を聞いていただけますか？

…実は…、その…」

立ち止まって俺を見つめたまま話始めたリーナさんの瞳が潤む。

こぼれそうな涙を堪えながら途中で詰まりながら、でも必死に喋り始めた。

内容は彼女の昔話だった。

物心ついた頃から今回のように急に記憶が途切れるようになった事。そしてその度に家族以外の周りの人間が自分から距離を置くようになった事。

中にはそれでも友達だと言ってくれた人も居たが、二度三度とリーナさんの記憶が飛ぶ現象が起けると他の人達と同じようにリーナさんから離れていった事。

だからそうなる前に、俺に自分には近付かないようにしてほしい事。

…事実上の友達関係破棄宣言だ。

前にも言ったかもしれないが、俺は肝っ玉は小さいし短気だしハ
ンサムでもない。

だが、俺の心の奥には煮えたぎる性よ…もとい、リーナさんへの
恋のパワーが溢れている。そりゃあもう、某ファーストフードの牛
丼のつゆだくだくだくよりもタップタップと満ち満ちて熱く濃厚な気持
ちがだ。

「…リーナさんに一つ約束出来る事があるよ」

自分に近付かないでほしいと言ってしまった後、気まずそうにし
ていたリーナさんは驚いた顔で俺を見つめる。

朝に友達になった。その日の夕方に近付くなという失礼な事を言
ったのだ。

俺の発言は彼女の予想の斜め上をいつていたのだろう。怯えた顔
で俺の次の言葉を待っている。

「俺は約束を破らない。

今日朝、友達になるって約束したんだ。

俺は君から離れていかない。逃げない。物理的に不可能にならない
限り、友達で居続ける。

…って言っても、父さんが男が一度した約束を破るなって言われた
から、そう言ってるんだけどね」

父さん風に言えば“吐いた唾飲むな”って所だな」

さて、俺は言いたい事は言った。

…彼女の反応は？

彼女は驚いて目を見開いて固まったままになっていた。

…おい、目が乾くよー。

「…一つ、…一つ聞いて良いですか？」

表情が固まったままのリーナさんの口が某SF人形劇の人形のような動きでカクカクと言葉を紡ぐ。

声に感情の抑揚が無いからちょっと怖いんだけど…。

「…いいよ。何？」

リーナさんの次の言葉を促す。

「…その約束は…守られるのですか？」

…あー、俺を疑う訳ね…。まあ、そりゃあそうだな。
昨日今日会った奴を信じろとは言えないしな。

「うーん…、今は信用してとしか言えないよ。

後は、今後の俺の行動を見てリーナさんが判断する事だよ。

…あーっと、これは僕の希望でもあるんだけど、リーナさんと俺の関係をもう一段階深めても良いなって思ってるんだけど…」

な、何を言っているんだ、俺の口?! 勢いに任せて告白紛いの言葉
を言っちゃった!…ど、ど、どうする?! どうしよう?
!

なんか熱いパトスが体中を駆けめぐってういーんって勝手に言葉
が出てきて…、その…、言っちゃった!…!?

取り敢えず落ち着け、落ち着け俺!!

…うん、今顔が真っ赤だけど夕日のうえに逆光だから解らないよ

ね……つてしようもない状況判断をしている場合か！？

あわわわ…、ど、ど、どうしよう？！

外見上はリーナさんをじっと見つめ、内面ではだんじり祭りとねぶた祭りと裸祭りとお柱祭りとリオのカーニバルとが同時開催でケチャとエイサーとロ○ヤルフィルハー○ニー管弦楽団とヘビーメタルバンドがBGMを担当しているような力オスな心理状態の俺と、内面は解らないけど瞳を未だに見開く驚きの表情を崩さず俺を見つめるリーナさん。

突然に、本当に突然にリーナさんの目からぼろぼろと涙が溢れたいしくしくとかさめざめとかいうレベルじゃなく、じゃーじゃーというレベルだ。

一般的に言う号泣と言っていていいだろうか？

「だぐみ さん！！」

「ひゃい！！」

突然にリーナさんが俺の名を叫ぶ。驚いた俺は変な返事をしちやった。ひゃいだって、ひゃい。…我ながら締まりがないね…。

いきなりリーナさん、俺に向かってダッシュする。俺は当然両手を広げリーナさんを抱きしめるべく構える。うゝん、俺ってジェントルメゝン（？）。

そんな俺に訪れたのは柔らかで心地よい抱擁……

……ではなく、鳩尾への頭突きでした。

………恥ずかしながら、三分ほど立ったまま気絶していました、俺。

リーナさんに揺さぶられて起きたよ…。

抱擁はされていたようだが、反応の無い俺に違和感を感じたリーナさんが、俺が両手を広げて立ったまま気絶していたのに気付いて揺さぶり起こしたらしい。

楽しめたのは服に残った残り香だけでした。とほほ…。

「…ごめんなさい、匠さん…。私距離感無くって…」

「いゝいゝですよ、ごえゝっ…」

道端でしゃがみ込む俺の背中を甲斐甲斐しくさするリーナさん。
おゝえゝっ…、吐き気がまだ収まんねえわ…。

「リーナさん、ごえゝっ、その、さっきの、うゝえゝっ、返事って、その、ぐえっ…」

…なんか締まらないな、俺。

「あつ、はい、勿論です！！私も匠さんと深い仲になりたいです！！」

…いやったーっ！！！！初告白成功だー！！！！

「ぶえっ、本当に！？ぐぼっぼっうぶっ…！！」

…何か酸っぱいの出てきた…！！くっ、必死に、ングッ、飲み込む、ングッ、のみ！メイク・ア・ムードオオ！！

そんな危機的な俺の状況を余所にリーナさんは綺麗な曲線を描く顎の前で両手の平をパチンと合わせ、弾けるような笑顔と共に俺の思っていた結果と別の結論を嬉しそうに喋り出す。

「匠さんと親友になれて光栄です!!
親友なんて初めてです!!」

…。

……。

……… いやいやいや、ちょっと待って? 友達より深い関係って恋人だろ?

友達以上恋人未満という言葉もあるんだよね?

あれ、親友って…? …… どういう事?

「…あの…」

「うふふつ、そうだ、もし宜しければ親友になった記念に私の家でお茶を飲みませんか?

私のブレンドのハーブティーを淹れます♪

友達をお部屋に招待するなんて初めてです♪」

…親友…。…お茶…。…ハーブティー…。

…ああ、勘違いなんて嫌いだ…。…思想の違いなんて無くなっちゃえ…。

俺の初告白が勘違いに終わるなんて…!

おろろーんっ!!!

「部屋がちよつと散らかってますが、勘弁してくださいね♪
うふふつ♪」

おろろーん!!

……あれ？

…部屋…が散らかって…いる…だと…？

…部屋？

…散らかって…。

…いる…？

「ご馳走になります！ハーブティー、大好きです！！」

「そうですか、よかったです♪

じゃあ行きましょう♪」

「はい！！」

「ふふっ♪」

…別に気がフレた訳じゃないよ？

今回は残念な結果になってしまったが親友になれたのなら、それなりのイベントを経て次へのランクアップもあり得るという事だ！それよりも、リーナさんの散らかったお部屋で頂くハーブティー！ハーブティーを蒸らすにはじっくりとした時間を要すると聞く！ならば、ならば、散らかったお部屋をじっくり観察出来るという事だ！盗撮も盗聴もしない！母さん、変な所に連れ込むなと言う貴女の言いつけを守りつつ、極上の女の子の部屋をねっとり観察する事が出来るという、この絶好の機会を逃していいのか、いや逃してはなるまい！！俺の告白がスルーされたなぞ些末な事！いや、スルーされたならノーカンとしてもいいはずだ！いや、もはや既にノー

カンー！我が辞書にフられたという言葉はまだ無い！少しオツチヨ
コチヨイのリーナさんの事だ、下着なんかも見れたりなんかした
りして！あわよくば胸チラやパンチラなんかの極上イベントなん
もあるかもしれない！

夕闇に徐々に暗くなるリーナさんのお部屋にて、ヨロケたリーナ
さんを底う形でベットに押し倒してしまうような格好になる2人。

「あつ、ごめん！すぐに退くから！」

「…いい…ですよ…」

「…えつ、今何て？」

「…あの…、匠さん…になら…、いいです…」

むーはー！！！！！！

なんて極上イベントも存在するかもね！！

「…という事で、お邪魔します！！」

「…？」

リーナさんは俺の顔を不思議そうに見上げているが気にしない♪
場所は何時の間にやら既にフォルムング邸の玄関にまで来ていた。
この場に居たのが妄想を膨らませる俺と俺を部屋に入れる事の恥
ずかしさに白磁の頬を桜色に染めながら玄関のドアを開けて俺を招
き入れようとしていたリーナさんだけでよかった。

ここまで来て俺の口から我慢できずに妄想の断片が吹き出しかけ
ててしまった。

…いかにいかに、自重しなければ…。

こんな妄想を世の中に誤ってさらけ出してしまえば、リーナさんの関係の進展どころか俺が社会的に死んでしまう。

「…あの、私の部屋…二階なんです」
どうぞ」

ドアを押さえ招き入れる仕草のリーナさん。

「お邪魔しまーす…、…あれ？」

フォルムング邸の玄関をくぐると朝見た段ボールの山が……。あれっ？……無かった。

「…リーナさん、ご両親が予定より早く来たのかな？
片付いてるよね？」

リーナさんが扉を閉めながら後ろ姿で、何故か抑揚のない言葉使いで俺に答える。

「…いつものお手伝いさんが来てくれたんですよ。
…安心して下さい、もう居ませんよ…。」

「…えっ…。」

今帰ったばかりなのに、何故家の中の事を理解しているのか？
そして、“いつものお手伝いさん”って誰？三人家族って言うてたよね？

固まってしまう俺。

「さっ、二階へどうぞ」

くるりと振り向いて満面の笑みで階段を掌で指し示すリーナさん。

カチャリ…

…今、後ろ手で鍵を締めたよね…？…何故…かな？リーナさんの笑顔が心なしに邪悪に見えるのは気のせいという事で…。

「ささっ、どうぞ。」

こちらです」

先に階段を上り俺を先導するリーナさん。

目の前でスカートの上からでも解る形の良い、胸に負けないほどのボリューミーお尻がふりふりと揺れています。

俺の頭の中の疑問は遙か彼方にすっ飛んでいき、操られるように階段を上るおし…リーナさんの後をふらふらと付いて行っただ。

…ほやっつ、お尻は世界を平和にするよね」

…リーナさんの部屋は意外に普通だった。

勿論、これも片付け済み。

…散らかってるんじゃないのかよ…。お手伝いさんとやらのバカ野郎おー！！

「準備してきますから適当にそこら辺に座って待ってて下さいね」

「解った」

…だが、そんな不満な様子なんか微塵も見せない。
だって俺、英国紳士（嘘）だもん。

クルリと見渡す彼女の部屋。八畳位だろうか？

家の外観と同じく木材をふんだんに使い、淡い色合いの表面処理をした木目に囲まれた部屋。

濃いめの色合いの木材（違う材料を使っているのか？それとも二スでも塗っているのかな？）の質素な感じの机とベット。マットレスと掛けてあるキルトの掛け布団（ベットだからシートというのかな？）は淡い緑を主体とした色調。

あと小振りで低めなティーテーブルと背もたれのない座面が色違いの椅子が四脚。幼稚園児辺りが座ったらびったりな感じだ。

洋服類は見あたらない。壁の扉の向こうの収納スペースか他の部屋に洋服専用の部屋でもあるのだろうか？

…そういえば（思い出したくはないが…）彼女曰く“普段着”のあのマスクとローブ、そのどちらかにあるんだろうな…。いや、思い出さなきゃ良かった…。

そして何よりも目を引いたのが、プランターと植物の数だ。リーナさんのお父さんが作ったと思われる古樽を再利用したプランターがそこかしこに置かれ、見た事があるようなハーブから、見た事もないような綺麗な花や瑞々しい葉の植物から禍々しい感じを醸し出す食虫紛い（俺の知っている食虫植物とは根本から違う）の植物が部屋の各所に彩りを与えている。

天井を見上げるとそれらハーブを纏めて感想させた物が幾つも吊ってあり、湿気を防ぐためか空調ダクトに取り付けられた木製ファンが三機ほど（季節が巡れば、本来の用途である冷暖房設備として使うんだろう）ゆっくりと回っていた。

ふと視線を感じクリーム色の出入り口のドアを方を向くと、ドアが少し開いてリーナさんが覗いていた。

「…あの…恥ずかしいのであまり見ないで下さい…ね」

恥ずかしげにはにかむと、パタンとドアを閉めてカツカツと階段を下りる音がした。

…やばっ、じとじと見ていたとこ、見られたな…。

…でも仕草は可愛かったが、何時から俺を観察していたのかが不明のため、少々のホラー臭を感じながらも青の小さな椅子に座り、傍らの床に鞆を置く。

…残念ながらトレジャーハンティングを諦めるか。

…待つことしばし。

…彼女はまだこない…。

ハーブティーには詳しくはないが、普通は乾燥ハーブとお湯を準備して、ティーポットにハーブとお湯をぶち込んで、それでもって蒸らすまでの間に楽しくお話なんかしたりして、まかり間違って「…いいよ、…匠君なら…」とかいう台詞が聞けたりするんじゃないのかよ…！

溜息を吐く俺の視界の片隅で窓の付近に蠢く物が見えた。

…おろ？猫か？

窓に顔を向けると窓の外は青と赤のグラデーション。古くさい言葉で言う所の“カワタレドキ”。禍々しく言うならば“オウマガコク”というんだらうか？

… すいません、漢字知らないんです…。

さて動物好きを公言する俺にとって猫というキーワードはかなりの魔力を持つもので、俺は吸い寄せられるように窓に歩み寄った。だけでも、すぐに变だと気付く俺。

リーナさんの部屋の窓はプランターなんかを置いてある事からも解るように出窓になっているのだが、その出窓の外は猫どころか鼠さえも歩けるような足場がない。

ということは猫なんかは窓の外には居なかったという事だ。…足の長さが二階に届く猫が居れば話は別だが…。…怖…。

馬鹿な考えは頭の中のゴミ箱にドラッグしてポイッして、動いた物の別の可能性を考える。

… 鳥かな？

しかし鳥ならこの時間は巢に帰る時間であり、夜行性の物でないかぎりこんな所を彷徨く筈がない。

フォルムング邸と葛葉邸の裏には古い神社の裏山になっているので、リーナさんが餌付けしてる（（注）完全に“しそうな”という妄想で話しています）なら来るけど、昨日に引越してきたからまだ餌付けを始めていないはずだ。（クドいようだが、必ず鳥に餌付けはするだろう！そして野良猫は拾ってあげ、雨に濡れた子犬とは一緒に風呂に入るに違いない！そして俺は犬に成りたい！！はあ…、はあ…、はあ…）

… はて、では何なんだ…？気のせいだったかな？

いぶかしみながら視界が悪くなった外をもつとよくみようと身を乗り出した俺の胸板を何やらくすぐる物が…。

…？

…はてさて、何じやらほいつと首を傾げる。

うに

うにうに

うにうにうに

うにうにうにうに

うにうにうにうにうにうに

……………？

…！！！！！！！！

…俺は今猛烈に下を見たい…。

…だが下を見たくない…。

理由は至極簡単だ。だって俺の胸板の下にあるのがプランターだからだ。

例の食虫植物が植えられているやつだ。

…という事は、今俺の胸を触っているのはその食虫植物ということになる。

ごく僅かな確率としてプランターに紛れ込んだ虫・鼠・土竜等、生物の可能性を俺は望むが…。

…残念ながら、その確率は低いだろう…。

ん？

うつ…。

うあつ…。

あつ、あんつ…。

…うんっ、あつ♪

……うーん、テクニシャン♪

最近の食虫植物は、あつ、ボタンを外して、うつ、アンダーシャツを、はっ、たくし上げてピンポイント、うんっ、攻撃をしたりはあつ、するんだ♪

…さて、現実逃避も程々にして…。

…んなわけあるかー!!!

格闘対戦ゲームばりのバックステップをかますと、触手(?)で直前までその場にあった俺の胸板をうにうにと触っていた様を想像出来るように中空をまさぐる食虫植物。

……やっぱりと言うべきか、マジっすかと言うべきか…。

言葉も出ない状態の俺の耳に入ってきたのは階段を上げる音。

…まずい!このままでは、初めて入れてもらった女の子の部屋で制服の前をはだけさせた変態に見えてしまうのではないか!

慌てて服装の乱れを俺が直した直後、ポットとティーカップと何やら焼き菓子的な物の皿を乗せた花柄トレーを持ったリーナさんが部屋に入ってくる。

「あら、座ってゆっくりして下さってよかったのに、
…どうかされたんですか、匠さん？」

よっぽど俺が変な表情をしていたのだろう。トレーをテーブルに置き、俺に心配そうに近付くリーナさん。

服装の乱れは整えたが表情と心の乱れは整えられず、思わず俺は例の食虫植物を見てしまった。

俺の視線を辿り、そちらを見るリーナさん。

そしてそこには未だにうにうにと動く触手（？）。

…ヤバい、俺の同様の原因を悟られる…！俺がリーナさんを育てた植物にヒいているのを知られたら、嫌われたりして…。

…しばしの沈黙。

「あつ、匠さんもミントがお好きなんですね」

…へっ…？

…いやいや、待ってくれ。さっきはハーブティー大好きとか勢いで言っちゃったけど、俺はそんなにハーブには詳しくはない。…でも、ミント位なら見た事あるし食べた事もある。なによりミントに触手なんか無いよな？

…だが、俺が出した返答はこうだった。

「…あははっ、そうそうそうです、俺ミント大好きなんです」

…神よ、チキンな俺を許したまえ。

ハーブティーを独自のブレンドで淹れる玄人に反論なんか出来る訳もなく。それが惚れた女性ならなおの事。

例えそれが触手をうねうねと蠢かせる食虫植物擬きだとしても、

俺はそれが新種のミントだと思い込むことにした。

…嗚呼神よ、罪深き俺を許して下さい…。

「じゃあハーブティーにミントの葉を浮かべよう」

…あれ…？

俺は人生の選択をたった今間違えたようだ…。…後は祈る事だけしか出来ない…。

お腹を壊しませんように…。

平静な表情を保ちながら八百万の神々と思いつく全ての仏様とイエス・キリスト様とイスラム教典とインドの神々等に祈りを捧げるという離れ業を披露（…というか、外見からは見えないか…）している俺を余所に、何やら俺に差し出すリーナさん。

…？

これって、…イヤプロテクター…かな？

そう、リーナさんが差し出したのはニュースやドラマや映画等で射撃場の中での発砲音から耳を保護するためのイヤプロテクターだった。

「…あの、これは？」

「イヤプロテクターですけど？」

…いやいや、それは解ってるんですけど、これをどうしろと…？

よっぽど俺が困惑した顔をしていたのだろうか、リーナさんは肩を竦めると率先してイヤープロテクターを頭にはめた。

…うーん、悩んでもしょうがない。郷にいれば郷に従え。俺もリーナさんに続き、イヤープロテクターを頭にはめた。

それを確認したリーナさんは俺の目の前で手を打ち鳴らす。

…うん、全然聞こえない…。

取り敢えず、イヤープロテクターが有効な事をリーナさんに身振り手振りで伝える。

それが伝わったのか、つかつかと窓辺に歩み寄るリーナさん。異常な状況下なのに、歩く事で軽く上下に弾む彼女の胸の膨らみを見てしまうのは男の悲しい性です。

そんな俺の邪な視線も何のその（女の人って男の“そういう”視線は解るって言うけど本当かね？）、未だにうねうねと動く触手をまるで慈愛に満ちた母の様に愛おしげに一撫ですると、おもむろに葉っぱを二枚摘み取った。

ぎゃぎゃきゃーん！！！！

…。

……。

………。

…もういろんな事が起こりすぎて何をどう言ったらいいのやら…。今、イヤープロテクターを突き抜けてとんでもない叫び声が聞こえたんですけど…。それって自称ミントさんの叫び声なんですか？

…そうなんでしょうね…。

突然の事で固まっている俺の前でリーナさんがイヤープロテクタ

―を外す。

…もう外していいのかな…？…もう叫ばないよな…？

さっきの叫び声で耳鳴りが残っているが、恐る恐るイヤープロテクターを外しリーナさんに手渡した。

…嗚呼、まだ耳がキーンっていつてら…。

「それじゃ、お茶を淹れますね♪」

…いろんな意味でそのお茶は大丈夫なんでしょうか…？

その後リーナさんが淹れてくれたハーブティーは、浮かべたミント（？）の香りと相まって俺に極上の安らぎを与えてくれた。…その安らぎの陰には、今後原因不明の腹痛に襲われるかもしれない（死さえも覚悟しましたよ…）という恐怖若干見え隠れしてはいたが…。

そうそう、例の俺の妄想したイベントはひとかけらも実現しなかった事をここに記します。

…正直、あの悲鳴で毒氣と度肝を抜かれただけでした…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9009x/>

マンドラゴラ畑でつかまえて♪

2011年12月2日15時56分発行